
ひとりぼっちの怪獣

かりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりぼっちの怪獣

【Nコード】

N5000V

【作者名】

かりん

【あらすじ】

とある森の奥ふかく、一人ぼっちの怪獣がいました。怪獣はいつも一人ぼっちでしたから、村のみんなと仲良くなりたいと思っていました。

短編小説サイト【セカイのカタチ】 / 童話館【ぐるぐるの森】からの転載です。

ひとりぼっちの怪獣

とある森の奥ふかく、一人ぼっちの怪獣がいました。

怪獣はいつも一人ぼっちでしたから、村のみんなと仲良くなりた
いと思っていました。

だから、ある日、森をでて、みんなのところへ出かけました。

「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

もしかして、ぼくのお顔が恐いのかな？

池のほとりで頬づえをついて、怪獣は水面をながめます。

水の鏡にうつった顔には、鋭い牙が生えています。そういえば、
ちよっと恐そうです。

さて、どうしたものでしょう。

少しでもかわいく見えるよう、笑い方の練習をたくさんしました。

さあ、これでよし。

一人ぼっちの怪獣は、いそいそ、みんなのところへ出かけました。
「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

につこり、みんなに笑いかけます。

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

もしかして、ぼくのシッポが恐いのかな？
大きな体を、ぐいと、よじって、怪獣はシッポを振りかえりまし
た。

シッポはとても大きくて、鋭いとげとげがついています。そうい
えば、ちよつと恐そうです。

さて、どうしたものでしょう。

少しでもかわいく見えるよう、赤いリボンをつけてみました。

さあ、これでよし。

一人ぼっちの怪獣は、いそいそ、みんなのところへ出かけました。

「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

リボンのシッポを、ふりふりします。

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

もしかして、大きなこの手が恐いのかな？

右手と左手をもちあげて、怪獣は両手をながめます。

五本の指には長い爪がついていて、全部するどく尖っています。

そういえば、ちよつと恐そうです。

さて、どうしたものでしょう。

みんなが恐くないように、ぷちん、ぷちん、とするどい爪を切り
ました。

さあ、これでよし。

一人ぼっちの怪獣は、いそいそ、みんなのところへ出かけました。

「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

まあるく爪を切った両手を見せます。

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

もしかして、大きなこの足が恐いのかな？

足を片ほう持ちあげて、怪獣はじっくり調べます。

怪獣の足は大きくて、小さなうさぎやネズミなんかは、しょつちゅう踏みつぶしてしまいます。そういえば、ちよつと恐そうです。さて、どうしたものでしょう。

怪獣は森にいき、うさぎやネズミを踏みつぶさないよう特訓しました。

さあ、これでよし。

一人ぼっちの怪獣は、いそいそ、みんなのところへ出かけました。「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

がに股のヒザを、ぷるぷるしながら内股にします。

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

もしかして、熊を食べるのが恐いのかな？

お食事の途中で気がついて、怪獣はバリバリ食べていた骨つきの肉をながめます。

ごしごし口をぬぐつてみると、お口のまわりも、まっ赤です。そういえば、ちよつと恐く見えるかもしれません。

さて、どうしたものでしょう。

大好きな肉を食べるのをやめて、怪獣はガリガリにやせ細ってしまいました。

さあ、これでよし。

一人ぼっちの怪獣は、いそいそ、みんなのところへ出かけました。「ねえねえ、ぼくも仲間に入れてよ」

よろよろしながら森をでて、やせ細った手をあげます。

村人は飛びあがり、ばらばら逃げていきました。

怪獣は洞窟にこもってしまいました。

村の人たちに嫌われないよう、あんなにあんなに、がんばったのに、みんな逃げていくのです。

こみあげた涙をぐいとぬぐって、ぐすんと膝をかかえます。すっかり、いじけてしまいました。

外ではピューピュー、風が激しく吹いています。嵐がやってきたのです。

暗い洞窟のすみっこを、一人でにらんでいた怪獣は、ちら、と外を、ふり向きしました。

次の朝には、ひどい嵐はおさまっていました。

とうとう一睡もできなかった怪獣は、ちら、ともう一度、外を見ました。

村のことが気になって気になって仕方ありません。だって、あんなにひどい嵐ですもの。みんなは、いったい、どうしたでしょう。

よし、と一つうなずいて、怪獣はげんこを握って、立ちあがりました。

村の様子を見にいこう。

大嵐に襲われて、村はめちゃくちゃになっていました。

川は氾濫、畑は水びたし、作物はすべて枯れはてて、くったり地面にはりついています。

家々の屋根も吹きとばされて、もう住むことはできないでしょう。

家と畑をうしなつて、人々は途方にくれて泣いていました。大きな檜の木の下で、肩をおとして、うなだれています。

荒れた畑を見まわして、怪獣は雄叫びをあげました。

「もう、嫌われたって、かまうものか」

怪獣は大きなシッポを振りしました。

シッポのただの一振りで、枯れた作物がなぎ払われて、まっさらな畑になりました。

川まで行って怪獣は、地面を大きく蹴りました。

土をえぐられた地面のみぞに、ざあつ、と川の水が流れこみました。水は、ぐんぐん、村の畑にむかいます。

怪獣は森で木を切つて、それを何本も小脇にかかえて、えっさほいさ、と運びます。

村と森とを往復するうち、家をつくる木材が、どん、どん、どんっ！ とみるみる地面に積みあがりました。

そうして怪獣はふり向いて、恐い顔でにらみます。

これ幸いと襲いにきていた盗賊が、あわてて逃げていきました。はらぺこのおなが「ぐうぐう！」と鳴り、ごう音が地響きのようにとどろきました。村の人々が震えありましたが、これはどうにもなりません。

村人は茂みに逃げこんで、様子をおそろおそろ見ていました。

怪獣の方をちらちら見ながら、ひそひそ隣と話しています。

誰も茂みから出てきません。息を殺して、じつと怪獣を見ています。

きつと人々は怪獣のことが、もっと恐くなったのでしょう。

夕陽に染まった赤い畑に、ひとりで立っていた怪獣は、とぼとぼ戻っていきました。

ジメジメしめった薄暗い洞窟で、怪獣は横になっていました。

お腹がへって死にそうです。もうずいぶん長いこと、なにも食べていないのです。

なのに、動きまわったりしたものだから、もう立ちあがることもできません。

すっかり痩せて、弱ってしまつて、池に水を飲みに行くことさえ、できません。

わいわい、がやがや声がしました。

大勢の人の声、洞窟の入り口の方です。

村人がやってきたのでした。

人々は手に手にたいまつをかがげ、クワやカマを持っています。

そうか、と怪獣は、よわよわしくつぶやきました。

「ぼくを退治しにきたんだな」

大きな体の怪獣が弱ったところを見はからい、皆でやってきたのでしょう。

あんなに大暴れしたんだもの、みんなに嫌われても、あたり前だ。かなしくて、かなしくて、かなしくて、怪獣は、ぽろりと、大粒の涙をこぼしました。

たいまつをかがげた村人たちは、口をへ字にひん曲げていました。

たちまち入り口にいらんで、洞窟をふさいでしまえます。

見事な白ひげのおじいさんが、みんなにひじでつつかれて、おずおず前にでてきました。

頭から麦わら帽子をとりさつて、胸の前でかかえます。

おほん、と声の調子をととのえて、はげ頭の村長は言いました。

「仲間になってくれんかね」

一人ぼっちの怪獣は、みんなと一緒に森をでて、末ながく笑って暮らしましたとさ。

おしまい。

ひとりぼっちの怪獣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5000v/>

ひとりぼっちの怪獣

2011年10月9日03時14分発行